

教職あらかると

教育問題

子供の生きる力の衰退、生活の危機

2019.01 後藤 忠

子供は大人を映す鏡、社会を映す鏡…。

教育問題は実は大人の問題である。

教育問題を子供のことと誤解して、真剣に手を尽くさなければ10年後、20年後にはもっと深刻な事態になる、だから今からそうした問題としっかり正対して、その解決に努めていかなければならないというのが教育問題である。

次に挙げる問題の兆候は確かに自分の中にもあると感じられる大人は、感性の豊かな大人と言える。

今、子供の生きる力は衰退し、生活は危機に瀕している。

情緒の不安、乱れ

「早く、早く！」

常に何かに追われている忙しい毎日…。

「ねえ、今日遊べる？」昔なかった子供の会話が今は普通に交わされる。

帰宅すると男の子はバットとグローブを、女の子はまりやとひ縄をもっていつもの場所に行った。そこには必ず誰かがいて、毎日、日が暮れるまで一緒に遊んだ。それが子供の放課後の風景だった。遊びは子供の仕事だった。

だが今は、外で遊ぶ子供の姿が見えない。

忙し過ぎる日常生活に子供のストレスはたまるばかり。落ち着きがない、集中できない、イライラする、キレル…。子供の情緒は乱れている。

耐性の欠如

辛さや苦しさに耐えられない、我慢、辛抱ができない。

「大谷翔平選手みたいになりたいな、吉田沙保里選手みたいになりたいな…」

いつも子供は子供らしい夢をもつ。しかし、夢や憧れへの努力が続かない、苦しいこと耐えられない、失敗するとへこんで腐る、失敗を恐れチャレンジしなくなる…。

この耐性の欠如が人間関係に顕れると深刻である。人の失敗や過ちが許せない、お互い様と頭で分かっているのに、どうしても許せない…。

社会性の未発達

人とかかわれない、人とかかわらなくても構わない、誰かと協働してものごとを行うよりひとりの方がずっと面倒くさくなくていい…。

だから、人の痛みや苦しみ、喜びなどが分からない、共感できない…。

自立の遅れ

自分のことが自分で処理できない、自分のことが自分で決められない、自分の言動の責任が取れない、取ろうとしない。そしてみんな人のせいになる…。(社会的自立、経済的自立、精神的自立が遅れている大人が増えているという。)

規範意識や倫理観の未形成

善悪の判断基準が形成されておらず、罪の意識や恥の感情が希薄である。

善悪について指導しても通じない、理解できない

い、だから身に付かない、守れない…。

「何で悪いの？ 誰にも迷惑かけてないし、別にいいじゃん。私の勝手でしょ、他人のあんたにとやかく言われることないよ！」

。

人間の尊厳の軽視

深刻な生命軽視の現状。「生命は何よりも尊いもの」と頭で理解していても、年間2万5千～3万人もの自殺者、それに占める50代、40代の分別盛りの世代の多さ…。

そして、一向に無くならない深刻ないじめの横行…。

自尊心の乏しさや自己肯定感の低さがその根源

今、顕在化している様々な教育問題の根底には、この自尊心の乏しさや自己肯定感の低さがあるのではないか。

「自分にはいいところがない」、「自分は人に誇れるものなど何もない」、「自分はダメな人間である」、「自分に自信がない」

そして子供は、「失敗しちゃいけない、間違っちゃいけない」と心身を固くし、ビクビクしながら息をつめて生きている…。

しかも、こうした傾向は年齢が上がるにつれ、また10年前の子供より今の子供の方が顕著だという。

自尊心とは、「自分は人間としてまんざらでもない存在だ」、「自分は価値ある人間だ」、「自分が信じられる、自分のことが信頼できる」といった肯定的な感情のことで、それは「生きる力」の源となる極めて重要な感情と言える。

自尊心が豊かな人は、

些細なことでキレたりしない。

困難にあっても自分を信じて辛抱強く努力する。失敗や挫折にもくさらない、「こんなことで終わってたまるか」と再び立ち上がる。

自分を大事にするように人も大事にし、人との良好な人間関係を築く。

自分の失敗や過ちを人のせいにならない。

恥を知って、誇り高い。

まして、自殺など絶対にしない…。

子供に自信と誇りを！

今、学校、家庭、地域社会が連携し、最も力を入れて取り組むべき教育課題は子供の自尊心や自己肯定感を高める教育であり、道徳教育はその中核を担う教育であらねばならない。

子供の欠点をあげつらい、その短所を是正するだけの道徳教育は真に改めなければならない。そんな道徳教育からは「生きる力」ははぐくまれない。